

機関番号：32661

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20791747

研究課題名（和文） タイとラオスにおける産後慣習に関する看護支援方策の基礎的研究

研究課題名（英文） A Study on Nursing care for Postpartum Practices in Thailand and Laos

研究代表者

佐山 理絵（SAYAMA RIE）

東邦大学・医学部・助教

研究者番号：40459821

研究成果の概要（和文）：タイやラオスで産褥期に実施されている、炭の側で過ごす慣習や食事制限を行う慣習に対する、高齢者、reproductive age 女性、看護師の考えを調査した。実施理由に子宮復古、母乳栄養の改善などをあげており、代替医療的要素が含まれることが分かった。親族には慣習の実施を勧めるという者が多く、今後も伝承されていく一方、保健医療分野の近代化が進んでおり慣習に対する文化を重要視した看護ケアが重要である。

研究成果の概要（英文）：For women and nurses in Thailand and Laos, objectives of postpartum practices included uterine involution and so on. Although postpartum practices are traditional customs, they also include elements of alternative medicine.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |
| 2009年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2010年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,000,000 | 900,000 | 3,900,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：国際看護学・異文化看護・産後慣習・母子保健・タイ・ラオス

1. 研究開始当初の背景

タイ、ラオスは、東南アジアの隣国であり、両国では言語・文化等において近似した面が多い。タイは、経済の発展とともに開発が進んでいる一方、ラオスの抱える大きな問題は貧困であり、国連基準で世界の最後発国の一つに分類されている。保健医療についても問題は多く、健康に対して十分な保護が必要な

母子を取り巻く環境は決して良くない。

ラオスでは産褥期に、ユーファイ、カラムキンという慣習が広く実施されている。ユーファイは、産後の数日～1ヵ月間、炭の側もしくは炭の上にベッドをしつらえ、過ごさなければならないという行動制限を伴う慣習である。このような慣習は保温の他にも魔よけや、過酷な環境において弱い存在である母

子を外敵や病魔から守り保護するという意味がある。カラムキンとは産褥期に一定期間食事制限を行うという慣習で、その制限内容は村や家族によって様々である。両者とも、産褥期を正常から逸脱する事なく経過するために必要であると考えられており、文化で育まれてきた重要な事象である。文化が近似しているタイでも一部において、同様の慣習が実施されている。

研究者によるユーファイ、カラムキンの実態と影響要因について調査では、今後もこうした産後慣習は伝承されていくということが明らかになったと同時に、多くの女性が産後慣習に強い価値を見出しながらも、それらの実施には苦痛を感じていることも明らかになり、異文化看護的視点、文化を考慮した看護ケアが重要であることが示唆された。

ラオスも近年の発展はめざましく、保健医療分野においては近代・西洋医学の充実といった形で表れている。そこで、妊娠・出産・育児を経験する女性の信念や価値観に大きく影響する伝統的、民間的ケアである産後慣習に対して、その価値を重要視したうえで、具体的な看護支援方策を見出す必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、異文化看護的視点、文化を考慮した看護ケアの立場で、産後慣習に対する看護支援や具体的実施方法を見出すことである。そのために、隣国で近似した文化圏であるタイ、ラオスにおいて産後慣習の経験や実態、支援を明らかにし、産後慣習の変化を両国の比較で研究することで、具体的な看護支援方策を提言することをねらいとした。

3. 研究の方法

1) タイ、ラオスにおける産後慣習、及び母

子保健行政や看護支援のこれまでの展開について既存の資料によりレビューし、比較した。

- 2) タイ国北部パヤオ県とラオス国ビエンチャン市において、高齢者と reproductive age 女性、それぞれ 10 名を対象に半構造的面接法を用い産後慣習の実施方法や価値観についてインタビュー調査を行った。
- 3) タイにおいて、産後慣習の実施場面を参加観察にて調査し、ラオスでの実施状況と比較検討した。
- 4) 産後慣習に関する具体的な看護支援方策を明らかにするため、タイ国北部の総合病院とラオス国首都の総合病院において、産科病棟に勤務する看護師を対象に、産後慣習への理解や自らの行動様式等を調査した。
- 5) 得られた成果を、国内学会及び国際学会で発表した。

4. 研究成果

1) 高齢女性

伝統医療医および高齢女性は、慣習実施の理由に以下のようなものをあげていた。ユーファイの実施理由は、子宮復古、創傷治癒、身体及び精神のリラックス、健康増進、長寿などであり、具体的な身体へのよい影響を目的としていることが分かった。また、カラムキンの実施理由は、食中毒予防や健康増進、母乳栄養の改善などをあげていた。母乳栄養の改善とは、食事を制限することで、母乳が「安定した状態」になると信じられていることに基づいていた。

これらのことから、高齢女性にとっては、産後慣習が代替医療的要素も含まれる重要な民間的ケアであることが分かった。親族には実施を勧めるという高齢者が多く、今後も慣習は伝承されていくと考えられる。

また、ユーファイ、カラムキンともに、実施の理由に「ピットという状態にならないため」ということがあった。「ピット」という状態になると、身体だけでなく精神にも影響を及ぼすとされるが、その症状は以下のようなものがあげられた。

＜精神状態に関すること＞

精神異常、短気、多弁、徘徊

＜身体に関すること＞

痩せる、めまい、発熱、視力低下、歩行困難、頭痛、痙攣など

＜全般＞

体調不良、病弱、死亡

最終的には死亡することもあると述べられており、「ピット」の状態になることが、産後の女性にとって、「大変悪い」状態を指すことが分かる。また、精神状態に関することも多くあがり、単なる身体のみでの体調不良ではなく、慣習を行う女性に対する看護ケアを考えるうえで、この「ピット」という状態がキーになると考えられる。高齢女性は、産後慣習はこうした状態になることを予防する民間的ケアという認識であり、そのため慣習実施の重要性を一貫して強調していた。しかし、実際に「ピット」の状態にあるという褥婦に会ったことがなく、この状態がどのようなことを指すのかをさらに考えていく必要がある。



図1 タイにおける産後慣習の場

2) reproductive age 女性

近年の経済発展とともに保健医療分野の近代化が進んでおり、特にタイにおいては、専門技能者の立会の下での出産は 99%となっており、高齢女性が出産を経験した時代と現代の母子保健医療上は大きく異なっているのが事実である。そのような中、reproductive age 女性は、慣習には肯定的で、近親者の指導のもと実施していることが多かったが、ユーファイでは炭や火を使わない「ユーイェン」を実施、またサウナで代用するなど実施方法の穏健化が進んでいることが分かった。

さらに、産後慣習を実施しなかったことにより将来の健康維持に不安を感じる、専門職者による病院での指導と家族からの教えの違いに困惑する、という状況があった。長年の教えは無視できるものではないという価値観のもとで、「変化」に対応していく必要がある現代の褥婦の状況を考慮した看護支援が必要である。

3) 看護師

ラオスより経済の発展が著しく、近代医学に拠る保健医療が充実しているタイでは、看護師は産後慣習を女性たちが実施していることは認識しているものの、産後入院期間にそれについて積極的に関わっていることはなかった。自らが学んできた近代医学もしくは看護学では、こうした産後慣習の実施は勧められるものではなく、病院などで行われる専門的ケアとは別の次元で起きている現象であると捉えているようである。

逆に、病院などの保健医療施設も少なく、専門的技能者立会の下での出産が 19%というラオスでは、分娩・産褥についていまだ民間的ケアが重視される度合いは大きく、女性たちの多くが慣習を実施していることを看護師も認識していた。しかし、産後慣習に対

して、どのような看護指導が行われるべきか、という明確な指針はなく、基礎看護教育の中でも触れられることはないという。そのため、産後入院中に看護師から行われる産後慣習に関する看護支援内容が、「慣習を実施しないことを勧める」「慣習の実施方法を穏健なものに変更する」「慣習の実施を積極的に勧める」というように看護師によって異なっていることが明らかになった。そうした文化に対する看護活動の内容には、文化や慣習に対する看護師個々の捉え方が影響している。

これまでの研究で、ラオスと同様に、タイにおいても産後慣習が行われているが、「炭」を用いる際に熱くなりすぎないようにする、食事の制限を一部緩和する等のアレンジが積極的に行われていることが明らかになった。また、高齢女性は、産後慣習の実施理由について、子宮復古や創傷治癒といった具体的事由を捉えている一方、reproductive age 女性は、実施の理由が不明瞭なまま慣習を実施していることへの不安があることが分かった。

タイでは、近年の経済発展とともに保健医療分野の近代化が進んでおり、伝統の継承が困難であることも考えられる。慣習といった文化を背景とした健康事象に看護師が対応する場面では、実施方法を対象と共に調整していくなどの文化を考慮した看護支援が重要となる

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

- ① 佐山理絵、タイ王国パヤオ県における産後慣習—第2報：高齢者とreproductive age 女性への調査—、第51回日本母性衛生学会、2010年11月6日、石川県立音楽堂
- ② Rie Sayama、 Postpartum customs in

Phayao Province, Thailand, 5th Asia Pacific Conference on Reproductive and Sexual Health and Rights, 2009年10月18日、Beijing International Convention Center

- ③ 佐山理絵、タイ王国パヤオ県における産後慣習、第50回日本母性衛生学会、2009年9月27日、パシフィコ横浜

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐山 理絵 (SAYAMA RIE)

東邦大学・医学部・助教

研究者番号：40459821

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし